

聖杯の英雄譚

伊佐那岐

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少年は実験動物だった。

目次

プロローグ01 召還 | 1

プロローグ02 ここにいる理由

57

第1話 ヴォルフ | 100

プロローグ 01

召還

——これはひとつの物語

少年はごく普通の家庭に生まれた。

母と父と自らが生まれた数年後に生まれた妹の4人の仲むつまじい家庭に生まれた。

少年は幸せだった。母と父とまだ言葉も発することの出来ない妹に囲まれた生活

消して裕福ではない生活だが、少年は毎日が楽しかった。

楽しかったんだと………思う。

『披見体N0999号、現在の適合率20%・・・30%・・・』

暗い漆黒の意識に淡々とした女の声が響く。

体中が痛い。体の内側から熱い、まるで全身が炎になったようだ。

しかし現在、僕の体は小型のカプセルに収納されている。ドロドロした粘液質の物質に包まれ、体中に機会じみた装置とコードに覆われている。

僕の意識は助けを求めようと声をあげる。

しかし、声が出ない。意識だけがはつきりし、指先ひとつ動かせない

解るのはこの内から湧き出る灼熱の痛みと、周りから聞こえる数人の知らない大人の
声

『ふむ……どうやら、今度の被験者は順応しているようだな』

『これは九条博士。ごらんの通り、披見体N0999は今までに一番あれに適合して
います。君……報告を』

『はい。現在披見体N0999号は適合率73%、過去全ての披見体の最高適合率が40%弱、これらの結果から見てもおおむね順調かと』

『すばらしい!!実にすばらしい……全ての根源に、全ての原点を垣間見ることが出来る。絶対に尽きることの無い魔力を持った最強の兵器が誕生する』

“おめでとうございます”と湧き上がる拍手

何がそんなにめでたいのだろうか

解らない、そもそも僕は何故こんなところにいるのだろうか

何時からこんな生活が続いたのか

長い・・・・・・・・・・まるで長い悪夢を見ているかのような

そう・・・・・・・・確か僕は

『イヤアアアアアアアアア!!!あなた!?!』

・・・・・・・・おかあ・・・・・・・・さん?

その時、暗い脳裏に浮かんでくる母と呼ばれていた者の叫び声

脳裏に焼きついたように浮かび上がっていく情景

真つ赤な血が床一面に広がる中、うつ伏せになり、糸が切れたように動かなくなる父
だった男

次にしかない移ったのは僕を庇うよう抱きしめる母のぬくもり

だが、冷たく暗い部屋に銃声が響いたと思つたら母の体が小刻みに震える。

「——ちゃん……早く……桜を連れて……」

逃げて。そう呟いた瞬間、母だったものは声ひとつ発せ無い肉の塊になった。

あたりに響くのはまだ年端も逝かない妹の鳴き声

・からだ。この日常が地獄になったのは

・から僕は両親を殺した男たちに連れられどこも知れないこの施設にやってきた
周りには時分と同じくどこから連れてこられた年端も行かない子供がいて、狂いも来る日も、なんだかわからない機械を取り付けられる検査、訳もわからない薬を飲まされる。

その度に激痛や嘔吐に襲われ、日に日に一緒だった子供の数も減っていった。

だが日に日に子供の数が減っていくにもかかわらず、周りの大人は微塵も気にしてはいなかった。

『披検体、N035番は消去。Δ3の薬品の要素が強すぎたか・・・』

『またか・・・σ16の構成に過剰に反応してしまって、披検体N0443から609までの肉体が腐り始めた』

『ここまで来てあれとの適合率がまだ20%もいかないとは』

薬品に苦しむ子供をケースの中に放り、毎日・・・を観察する大人。そして犠牲者の数約1000人にも達しようとする中、僕はカプセルに収納される前に・・・を
入れられた。

——黄金の杯

僕は・・・が何なのかわからない、知るはずも無い

だが大人たちは僕を台座に固定すると、僕の頭にヘルメット型の機械を取り付けさせる。

被せられた機械により僕は視界の全てを奪われて・・・は直ぐに感じた。

なんだか解らない、まるで体に溶け込むように・・・は僕の体に広がる。

毎日のように続いた痛みが痛みじゃないと言える様な激痛が僕の全身を駆け巡る。

叫ぼうにも叫ばれない

暴れようにも暴れられない

涙を流そうにも流せない

ああ……意識が朦朧としてくる。もう目の時分がどんな生活を送っていたのか、親の名前さえ消えていく

父の……母の……そして、妹の

(……さくら……)

まだキッチンと会話すら出来たことの無い妹の名前を最後に、僕の意識は……途切れようとしていた。

だが消えかかる意識の中、僕は

一瞬、
 臉の裏側に一際強く輝いた……
 に藁をも縫う思い出、
 手を伸ばした。

ビー!!ビー!!!

研究施設突如と響き渡る警報。何事かと辺りがざわめく中、少年の納められていたカプセルが輝きだす。

『なんだ!?!どうした!』

九条と呼ばれた男がコンソールを見ていた男に怒鳴り始める。男はモニターを眺め、ありえないといった形相を浮かべていた。

『解りません!?!適合率が90%・・・100%・・・120%!?!どんどんあがっていきま
す!?!』

『ばっ馬鹿な!?!こんな事が……早く!接続を遮断しろ!!』

『だっ駄目です!!こちらの停止指示に反応しません。緊急停止のコマンドも受け付けない……うつつわああああ!!!』

『………は………これが……産物の』

その言葉を最後に、カプセルより放たれた閃光に飲まれた男は、自らが夢見た存在の完成を目の前にその命を散らした。

???

そこは廃墟だった。

正確には廃墟になったばかりの建物が、爆発の影響か辺りの森林にその炎を撒き散らし、辺り一面が火の海と化している。

そんな紅蓮の炎の中に彼女は降り立った……。

周囲の紅蓮の炎よりも深い、赤よりも紅く、長く肩まで整った髪。全てを魅了してしまふかのような容姿。

そして何よりその手に握り締める血を沸騰させる真紅に輝く槍は、彼女の存在を一際異色に引き立てる。

「……全く、呼ばれるはずが無い物に呼ばれてみれば……何だ？ここは？」

女は思わず自身が手に持つ紅槍を一振り。ただ横に一文字に振られた槍によつて周囲の炎がまるで強風にあつたかのごとく勢いを失う。

「よしよし．．．しかし、私を呼び出すとは．．．．．本来ならばありえんことなのだろうが．．．」

だが私はこうして呼ばれ、導かれた。世界の理を外れ、死すら奪われたこの私を呼んだものがある。

．．．だけでも今の私の興味は尽きなかった。

嘗て異境・魔境において私を尋ねてきた者は少なからずいた。しかしこうして道を作り、私自身を呼び出すものなど人は愚か神すらしなかった。

どんな者だろうか．．．．．高望みするならば私を

「いや………を願うは酷な事であろう。……まして人の身で……む?」

女は歩みを止める。ふと前方から何やら妙な気配が……否……これは

「むっ!何やら近くに魔力を帯びた気配が感じられたと思いや……ランサーのサーヴァント。しかもこの気配……只者ではない。」

「ほう……その言いよう。主もサーヴァントの様だな。しかもその聖者を感じさせる佇まい、その手には離れていてもその存在を感じ取れる聖剣。セイバーのサーヴァントのようだな」

目の前に颯爽と現れた白銀の鎧を着こなした純真な騎士。その手に携えた見事な聖剣が紅槍を軽く構えるこちらに向けられる。

その身のこなし一つ一つ取っても見事の一言しか出てこない振る舞い。

「オレが名は円卓の騎士が一席、太陽の騎士ガウエイン。」

「……ガウエイン……円卓の騎士。しかも、かのアーサー王の実質的な右腕、マスターと出会えてすらいらないと言うのに、初手からこの様な強者とぶつかり合うとは……私も弟子のことは言えぬな。」

ふふつと不適にもその表情に薄笑いを浮かべる。

しかし、こうしてあえて名乗りをあげるのは何時振りだろうか。

相対する戦士達は私の正体を知った上で挑んできた。ゆえに名乗りを受けることは

あってもすることは無かったからな・・・

まあ・・・これも一興だろう

「私は、世界の外側にあり続けるモノ。老いを知らず、死ぬことも許されず、永遠を刻まれし永劫を生き続けるもの・・・オレが名は”スカサハ”・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・!!スカサハ!まさか御身はケルト神話における冥界”影の国の女王”・・・このようのお方と剣を交えようとは!!」

その名を耳にせずとも佇まい、そして目の前から紅槍から漂ってくる自分とは異なってくる神霊級の魔力。・・・まさかこの様な場で、神すら殺した存在と合間見えようとは

だが、とガウエインは一瞬疑問を抱いた。

「何故御身がサーヴァントとして現界しているのですか。貴方は英霊の座には収まって

いないはず。いや・・むしろ収まるはずも無い！」

「うむ・・お主の疑問も最もだがな・・今回は私も何故この場に召還されたかわからんのだよ。」

「では・・・貴方のマスターは？」

「うむ・・・残念ながら召還した場にはマスターの姿は無くてな。契約した魔力を辿っているうちに主と出会った訳だ。」

やれやれと肩を竦ませるスカサハだったが、彼女の言葉に驚きを隠せず思わず構えた聖剣を下ろしてしまおうガウエイン

「貴方も・・・ですか。実は私もこの場で召還され、マスターとの契約を辿っていくうちに貴方に」

「お主も・・・よもや、住まぬが少し待て」

自身の魔装を地面に突き刺し、瞑想するかのように目を瞑り沈黙を貫く。

(これは……私とガウエイン卿の魔力の流れが一つに……ということ)

太目を開きガウエインへ視線を配る。こちらの視線に向こうも小さい頷きを返してくる。

「なるほど、どうやら主と私のマスターは同一人物のようだ……やれやれ、久方ぶりに強者との死闘を味わえると思っていたのだが」

「……はこちらの台詞。神殺しを成し遂げた御身の槍術にオレが剣がどこまで通じたか。しかし主の許可無しに死闘はできない。この場は剣を納めるしかなかるう」

互いにここで戦うことは出来ない。ガウエインはマスターの許し無しに味方であるはずのスカサハとは本気で相対することは出来ない。すればこの場でどちらかが消滅

するのは確実だから。マスターの許可なしに”自らの剣を示したい”。唯・だけの個人的な理由で主であるマスターの立場を悪くすることなど忠誠の騎士たるガウエインには出来なかつた。

互いに争う理由無し……だが彼らは武器を再び手に構える。

「オレらのことを影から覗くは勝手……だがそこに隠れておるのは解つておる。姿を見せたらどうだ？」

スカサハとガウエインの視線がある一点に注がれる。

爆発によつて崩れ去つた施設の残骸その一際大きい残骸の陰から、現れる2つの影

「呵々呵々、オレらの気配に気づくか……さすがだな太陽の騎士。そして其方の婦人は初めましてかな……まさかオレら英雄を超えた英雄と合間見えようとは」

「アサシンさん！高らかに笑っている場合じゃないですよ!!」

瓦礫の影から出てきた内、高笑いしている男の方。服装かつら中国の英霊。・も足音気配などを全く感じない。姿が無ければ目の前にいるという認識さえ出来なかつただろう

・にももう一方、アサシンの影に隠れている幼き少女。薄紫色の髪に着飾った装飾品から見て、何処かの皇女、または貴族の出。・に彼女の手に持つ不可思議な杖から察するに恐らく

「アサシンに……その少女は見た感じキヤスターかしら？」

「何々何々……流石だ。既にオレらのクラスを言い当てたか」

当たり前だ。というよりもその気配、足取りで解らないはずが無い。

「伊達に長く生きてはいない……しかし、この近距離で、しかも敢えて奇襲をかけずに声をかけてきたと言うことは戦闘の意思は無いと思つて良いのかの？」

スカサハは自身の槍を構えつつ問いかける。その問いかけにふと目を閉じ、深く、そして残念そうな表情を浮かべながら頷くアサシン

「ふむ・・・ワシも本音を言えば、おぬし等の様な豪傑と一手あわせたかったが」

「アサシンさん!!」

「冗談だ・・・後は主が説明せい」

そういうとアサシンは興味がうせたのか残りの説明を隣のキャスターに預けて、彼女の後ろに控える。一方で説明を押し付けられたキャスターも文句を垂れつつもこちらを見向き、そして優雅に礼装をつまみ頭を垂れる。

「全く……失礼いたしました。影の女王よ。私はキャスタークラスで顕現いたしました……真名メディア。そしてこちらはアシン、李書文。今のオレ々にあなた方と戦う意志はありません。」

「ほう……八極の達人にしてその拳には『二の打ち要らず』とまでいわれた魔拳士、李書文か……なるほど納得する。しかし……お主が、あの“裏切りの魔女”メディア……？」

とてもではないが目の中の魔女には自らの弟を殺し、愛した男も容赦なく苦しめ殺した。まさに裏切りの魔女とも呼べる所業を行ったとは思えない……

「確かに貴方の仰りたい事は理解できます。私はコルキスの魔女と呼ばれる以前の、裏切りの魔女とよばれる以前のメディアと言えば宜しいでしょうか？」

目の前の少女は困ったように、オドオドした感じで自身のことを口にする。しかしスカサハは彼女のその曖昧な説明で納得した。

彼女の言うとおり、恐らくメディアはメディアでも魔女と称される前の、神殿で魔術を極め修行していた頃のメディアを呼び出したのだろう。

「主らのことはわかった……で、真名を明かし、敵対行動を行わぬということは……主らもまさか」

「はい……貴方のおっしゃるとおり、私と李さんは同じマスターから魔力供給を受けています、そして私の魔術が正しければ……貴方達も」

「と……言うわけだ。オレらも召還されたばかりかマスターの顔すら目にしておらん。」

……と李書文は不適にこちらに笑みを送ってくる。メディアも強い意志で、こちらを見据える。

「ランサー、セイバー、アサシン、キャスターのサーヴァントが全て1人のマスターの魔力供給で制限も無しに現界している……か」

今宵の聖杯戦争はこの段階で狂っている。狂っていないければ可笑しかった。

セイバー、アーチャー、ランサー、ライダー、キャスター、アサシン、バーサーカーの7体のサーヴァントで互いに戦い殺し合い、覇を競い合い、最後の1人になるまで戦い続ける。・・・が聖杯戦争のはずだった。

だが現状、1人のマスターによつて半数以上のサーヴァントが現界させられている状態だ。

もしや残るほかのサーヴァントも・・・そう思った。その時だった。

『
・
・
・
・
たす
・
・
・
けて
・
・
・
』

「えっ!?」

「ムツ……不味い!!」

「マスター!!」

「これはいかん!!」

その場にいたサーヴアントがその場から一目散に駆け出した。その速度や流石英霊、中でもスカサハの速度はサーヴアントの中でも素早く、最速のサーヴアントにふさわしく自らに助けを求めた声の主にすぐさま駆けつけた。

「……ッ！これは……」

その場に駆けつけたスカサハの目の前に映った光景。

「GYOOOOOOO!!!」

龍の雄たけびが戦場に響く中、目の前が異形の存在が埋めつくす。

死体^{アンデッド}、スケルトン、そして上空を覆い尽くすほどのワイバーンなどのモンスターが辺り

次々と首を翼を肉を骨を引き裂く狂戦士^{バーサーカー}。最早ワイバーンにとって空は絶対安全空域では無く、自らの命を刈り取られる狩場になっていた。

「はっ！あの程度の雑魚この我^{オレ}の手を煩わせずとも勝手に狂犬が始末すると思っただが……いやはや、物は使いようだな……そうは思わんか？冥界の女王よ」

ふと戦場で暴虐の限りを尽くす狂戦士^{バーサーカー}を観察しているスカサハたちの隣から現れた……に、若干殺意をこめて睨み返す。

視線の先……そこには黄金のプレートメイルに身を包み、黄金色の髪と真紅の瞳

でこちらを威圧するように見下しているサーヴァントが悠然とこちらに闊歩してくる。

「その不遜で傲慢な態度……に身に纏う魔力・サーヴァント。・も一級品の規格外と見るか？」

「ほう？^{オレ}私の価値を理解するか。だが規格外は其方だろう。我^{オレ}と同格にして、死すら超えた女が。」

「……ほう。私を影の国の女王……スカサハと知って……そのような暴言を吐き捨てる者は久しぶりだ」

「つくづく気が合うな……我^{オレ}も我^{オレ}に対してそのような上から対等に話しかける雑種は久しぶりだ」

「はっはっはっはっは」

!!!!!!

互いに面白くないがゆえに敢えて笑う。認めたくないがゆえに笑う。高らかに笑いあう。

「GYOOOOOOO」

!!!!!!

そんな2人に狂戦士バーサーカーの蹂躞から逃れた2匹のワイバーンがその嗜好の肉体を食らおうとその顎を迫らせる。

だがその場は既に、狂戦士バーサーカーの狩場同様に危険区域と化していたことに

「巫山戯るなよ若造が!!」

「雑種ごときが!!!不敬であると心得よ!!!」

「G
Y
a
a
a
a
a
a
a
!?!?!?!?!?
」

2匹のワイバーンは視認することすら出来なかっただろう。その槍の速度を、放たれた数多の武器を

視認することなく、ワイバーンは肉片へと代わった。

だが最初から2人のサーヴァントにはワイバーンなど微塵も、欠片も意識に入っていないかった。

「さあー神殺しにまで到ったその槍捌きでどこまで耐えしのぐか!!見せてミロオ!!」

黄金のサーヴァントの怒りの怒号と共に放たれたそれはスカサハにとって目を見張るものだった。

奴の背後、空間の歪みから放たれるは剣、槍、斧他数多の武器。しかもそれらの一つ一つが英霊が持ち得るに相応しき宝具、更に言えば中には不死のこの身をも殺せるであろう可能性がある武器も

私が望んだ死が、願った死がそこにある

だが………

「このスカサハ！ 召還された以上！ その任を全うできずに死のうなど！ 英霊に恥ずべき愚かな行いを！ 出来るものか!!」

スカサハの高速の槍捌きが次々に放たれる宝具の弾幕を弾き、叩き落とし、相殺させる。己に向かつてくる武器に対し避けようと馳せずに、自らが誇るやり捌きを持って全てを叩き落す。ミサイルのような集中放火を裁きながら尚も打ち払う。

そしてこれほどの宝具を持ち得るも、ただ投擲するだけ。自身では一切武具を振るおうとはしない。

そんな英霊はこの世で唯一人しかいない

「古代ウルクの王にして世界最古の王、英雄王ギルガメツシュ。．．．それが貴様の正体だな!!」

「我の名を口にするなど不敬であろう!!頭を垂れ大人しく地に這い蹲りながら死ね!!」

ギルガメツシュの怒号が更なる武器の増加を生み出す。嘗て世界の全てを手中に収めたが故に手にした宝具の原点

(チツ！ただ放出してくるだけならば良いが、この手数多さはつ厄介だ．．．だが)

所詮は放り投げるだけ。軌道が読めれば．．．

「何!?!」

ギルガメツシュの視界からスカサハの姿が掻き消える。一体何処へと周囲を見渡すが何処にもその姿が

「何処を見ている!!」

覆わず反射的に背後に向かって己が剣を放つがそのことごとく全てが弾かれその紅槍の剣先が英雄王の喉元目掛けて突き刺さろうと迫る。

「双方!そこまで!!」

ギルガメツシユの首元1mにも満たないところで紅槍の槍が静止する。あと少し制止の声が無かつたらギルガメツシユの首は胴体と永遠に離れていただろう。

「グッ……の……我^{オレ}が」

悔しさで齒軋りするギルガメツシユ。スカサハは不完全燃焼、中途半端に終わったこの戦いに水を差した声の主へと視線を向ける。

「何故止めた。……なんて言わないでください。あなた方は本来戦う必要などは無いのですから。」

声の主、優しい風貌に無理やり剣と鎧を着けた旗持ちの少女は力強い目線で死闘を行った2人のサーヴァントを見つめる。

目の前の少女は何者か……目の前のサーヴァントギルガメツシユは武器の使い方が

射出、投擲としての使い方だしたら恐らくクラスはアーチャー

では目の前の少女は最後の一席・・・ライダーのクラスだろうか。

「主は何者だ？よもやこの槍を止めさせたのだ、それ相応の理由なのだろうな」

「失礼いたしましたスカサハ様。私はジャンヌ・ダルク、今宵の聖杯戦争ではルーラーのクラスを持って顕現いたしました。」

ジャンヌダルク・・・百年戦争でフランスを救った英雄。しかしその後、国に裏切られその身を磔にされ、火刑によって命を奪われた悲劇の聖女。

だが彼女は今、自分のクラスを何といった？

ルーラー・・・聖杯戦争では聞かないクラス名だが・・・

「私のクラス・・・ルーラーとは本来、聖杯戦争における監督者、裁定者の役割を担いま

す。本来ならば召還されることがないのですが・・・ただ、行われようとする聖杯戦争が特殊な場合、または聖杯戦争によつてこの世界に歪みが派生する場合などに召還されます。」

なるほど・・・そういうことか

本来召還されるはずのないこの身がランサーのクラスで呼び出され

更にはほぼ全てのクラスのサーヴァントが一人のマスターによつて契約している。

聖杯もこの事態を異常と認識している訳だ。だが・・・

「一つ問うぞ救国の聖女よ。主はこの聖杯戦争が通常に・・・正しく執り行われるように管理する監督者として召還された・・・ならば何故主は、我ら同様にマスターによつて魔力供給を受けている？」

「っ!?!それ・・・は」

目の前の少女は予想外の問いかけだったからか言葉を詰まらせる。

目の前のルーラーのサーヴァントとして顕現したと名乗ったジャンヌダルク。ならば彼女にマスターはおらず、本来ならば自立制御オートマトンのような形でこの戦争に参加しなければいけない。

だが目の前のサーヴァントは己と同様、マスターによる魔力供給を受けて現界にいる。

「……………わからないのです。……実は」

そう言つて、ジャンヌは語りだした。

自身には本来与えられるべき、聖杯戦争の知識が与えられていないこと。

知識明けでなくルーラーのサーヴァント特有の対サーヴァント特有の令呪などのステータス面でもランクダウンの傾向が見られる。

辛うじて真名看破の能力だけは発揮できており、先程自分の名を所見で見破られたのはこの為であろうが

「おい！その女共!!この我を差し置いて勝手に話を進めるとは、不敬・・・と言いたい所だが、その道化、貴様我たちに何か伝えに来たのではないのか？」

ギルガメッシュが意味ましそうにほほをひくつかせる。だがそのおかげでジャンヌはこの場に駆けつけた重要なことを

「マスターの目が覚めました。この辺りのサーヴァントには伝えましたので、残るは皆

様だけ……」

「戯けが!!そのような重要なこと!もっと早く切り出すことつであろが!!」

「すつすいません。まさか同胞同士で戦っているとは思わなくて……」

「まあ……もうよいだろう。ジャンヌよ、早速だがマスターの元へ案内してもらえるか
?」

「はい。こちらです。……私に着いて来てください。」

そこは小さな小屋だった。

モンスターの死骸が山のように詰まれているあの廃墟より、北東に約5km程行つた

通常の人間ならばどう考えても遠方になるのだろうか生憎サーヴァントにとってはそのような距離は関係ない。

(ふむ……確かに、あの狂戦士^{バトサーカー}以外の全てのサーヴァントがそろっておる様だの)

スカサハは一瞬で小屋の中に存在する魔力を感知する。先程であったガウエイン、李文、メディア、そして名も知らぬ……恐らくライダーのサーヴァントであろう魔力……そして

残る最後の魔力反応を見て、思わず自分の勘を疑う。

なぜなら小屋の内部に存在するであろうマスターの魔力は我々7騎＋1騎のサーヴァントに魔力を供給しているにしては強大すぎる。これではまるで

「ふんっ！立ち止まるなら我は先に入らせてもらおうぞ。」

そういうと乱暴に小屋の扉を開けると問答無用で中に進入していくギルガメッシュ

「ああ．．！英雄王！．．．はあ．．．さてではスカサハ様、私達も中へ．．マスターが」

『うわああつあああん!!!
!!!うええええつええん!!!』

「．．．．．．．．．．」

お待ちです．．．と言おうとしたんだろう彼女は、だがその声は何処からとも無く叫ばれる．．．と言うより、小屋の中から発せられる幼い泣き声にかき消され、思ってもいないことに2人のサーヴァントの間に無言が続く

小屋の中にマスターやサーヴァントのほかに子供がいるのだろうかと思っただが．．直

ぐにその予感の外れと感ずく。

「ああ!!マスター!しまった・・・先に英雄王を行かせるべきではありませんでした・・・」

慌てて英雄王の後を追って小屋の中に飛び込んでいくジャンヌ

まさかな・・・と自身の中に浮かんだ予感を胸に恐る恐る小屋の扉を引き・・・中に
入る・・・

「全く!!あんたは何を考えているのよ英雄王!!こんな小さい子供にそんな威圧的な態度
で迫るなんて!!」

「いつ威圧的などではない!!これは王者の振る舞いと言うか!威厳として・・・」

「だからその振る舞いがどうしてこんな小さい子供に威圧的な眼光を向けるのよ!!」

「ほら・・・大丈夫。怖くないよ〜ごめんね。ああのお兄ちゃんこわかったね〜」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

最早小屋の中は混沌としていた。

子供に泣かれ思いのほか動揺しているギルガメッシュ

そんなギルガメッシュを説教するまだ名を知らぬ最後のサーヴァント

未だに泣き止まぬ幼子をどうにかしてあやそうとしているメディアと後から小屋の中に入ってきたジャンヌ

どうしたものかこの状況を傍観している李書文とガウエイン

思わず引いてしまう追うな混沌としている状況下だったが、そんな中スカサハはメディアとジャンヌが必死に泣き止ませようとしている幼子に注目し目を見張っていた。

その子の姿は病院の入院患者のように簡素な服に、首元に銀のチョーカーが填められていた。

そして何より驚いたのはその子の全身を覆うかのように赤い紋章が体全身に、手の甲から足の指先までびっしりと刻まれていた。

令呪……それは聖杯戦争におけるサーヴァントの絶対命令権

どんなサーヴァントでもこの令呪を使われれば従わざるを經ない。それが例えどんなに望まぬことでさえも

だが通常一度の聖杯戦争で1人のマスターに渡される令呪は3画のみ。

しかし……目の前の幼子には体全身を蝕むように令呪が根付いていた。

その姿はまるで……まるで

(生まれながらにして……呪いを与えられた……体を蝕まれ、人の断りを外れてしまった)

まるで自分のようだと・・・そう心の片隅で思い、心痛名表情を向ける・・・スカサハだった。

プロローグ02 ここにいる理由

僕は……暗く、深い海のそこに沈んでいく中、それを見た。

意識が遠のく最後の瞬間、僕は手を伸ばしたそれを

黄金に輝く金の杯。

聖杯……その杯は僕にそう語りかけてきた。男とも女とも言えない声で、僕の心に、脳裏に深く語りかけてきた。

聖杯、令呪、サーヴァント、英霊、僕の心に流れ込んでくる世界の知識が

そして最後に僕は知ったのだ。大人たちが最後に僕の体に何を溶け込ませたのかを

押して長い眠りを経て聖杯は最後に僕に語りかけてきた。

“ お前の望みは何だ？ ”

僕の・・・僕の望み

それは

ここは……何処だろう。

柔らかい……なんだろう、先程まで体にまとわりついていたドロドロした粘液や機械の感触ではない。

人の……それこそ既に記憶の欠片でしか思い返せない

人の温もり

「お……かあ……さん？」

重い脛を恐る恐る開くとそこは施設の真っ白い天井では無かった。

暗く誇りっぽい。それこそ廃墟になった山小屋のような場所だった。鼻を通して緑深い木々の香りが体を駆け巡る。

だけどそれ以上に僕を覗き込む人の視線

……誰？

見たことも無い人だった。だけど不思議だ……見たことも無い、知り合いでもないのに

「マスターっ!?目を覚ましたのですね。ああ！良かった」

「っ!?あう．．．あう」

僕の顔を心配そうに覗き込んでいた鎧姿の女性が目に涙を浮かべ、僕の体を強く抱きしめてくる。

突然の抱擁にどうしてよいか体が動けずたじろいってしまった。だけど

「．．．．．お．．．かあ．．．．．さん」

思わず、小さく口ずさんでしまったその言葉に抱きしめてきた女性は

「コツンツ！」

「ちよつと落ち着きなジャンヌ。」

「あうつ、プーディカさん・・・だって、マスターの目が」

「わかっているよ。英雄王の秘薬で落ち着いてはいると言ってもまだ危うい状況だ・・・あんたは英雄王を呼んできな」

「・・・解りました。ではみなさん・・・マスターをお願いしますではマスター・・・また」

あつ・・・僕を包んでくれたぬくもりが離れていく・・・

「ん？どうしたのマスター？」

気落ちしている僕にプーディカと呼ばれていた女性が顔を覗き込むようにしてこちらにその綺麗な顔を近づける。

「うん・・・熱は無いみたい。」

おでことおでこをくっ付け、こちらを慈しむ様な・・・そんな笑みを向けてくるプー
ディカさん

何故だろう・・・彼女からも、ジャンヌさんと同様・・・何か懐かしくて・・・暖か
くて

「プーディカさん・・・ちよつと失礼します。マスターこちらお水を魔術で冷やしておき
ました・・・お飲みになつてください」

プーディカさんの隣、誰だろうか。一瞬もう少し小さければ要請富み間違えてしまう
ほどの綺麗なおねえちゃんがその手に水が入ったガラス製のコップをこちらに差し出
している。

飲んでください・・・これは飲んでよいのだろうか

「い……頂き……ます。」

恐る恐る綺麗なおねえちゃんから水の入ったコップを貰い少しずつ口にする。

渴ききつた喉を氷のように冷たい水が喉を潤していく……気づいたらコップを両手でつかみ飲み干してしまっていた。

「あっ……」

もっと飲みたい。もっとほしい。僕は一瞬口元まで出たその言葉を咄嗟に飲み込んでしまう。

「……?どうしたの。もしかして……もっと飲みたい?」

「(ビクッ!)……ご……ごめんなさい」

反射的に謝ってしまった。謝らなければ打たれてしまう。殴られられてしまう。

お腹を空かせ、満足に水さえ飲ませてもらえなかった子供を見てきた。故の咄嗟の反射行動だった。

頭を抱え、小刻みに震える僕だったが次の瞬間、僕の頭を柔らかいものが包む

プーディカさんだ。彼女は自身に僕を抱き寄せて、優しく抱きしめてくれている。

それは先程ジャンヌさんが僕を優しく抱きしめたときと同じだ。人の温かみを直接肌で感じ取れる。僕の体を支配していた恐怖心が徐々に和らいでいく。

「良いんだよ……何があったかは解らないけど、私達に遠慮なんかしなくても。何も怖いことなんて無いんだから。……メディア」

「はい！……マスターどうぞ」

メディアの手には先程飲み干した冷水が元々あった量に注がれていた。僕は再び恐る恐る手に取り一気にそれを口に運ぶ。

冷たい水分が乾ききった体を、その命を活気付ける。

体中を優しきと言う熱が包み、渴き切った喉を潤す。

「相当辛い目に遭ったんだね・・・水一杯でこんなに喜ぶなんて」

「ええ・・・でももう大丈夫ですよ・・・マスター。貴方には」

「私達がついているから」

・・・うつつわあああああああ!!!

彼女達の温かい言葉に終に奥底に塞き止めていた感情と言う氷が溶け出し、涙となつて溢れかえる。

プーディカの胸に顔を押し付け溢れんばかりに涙を流し続ける。

「よしよし．．．大丈夫だ。私もメディアも何処にも行かないからな．．．何も遠慮しなくていいからな」

よしよしと頭を優しく撫でる2人のそれはまさに母親そのものだった。抱きしめ、優しくする。たったそれだけでも今自分達のマスターにとつては千の財宝よりも価値のある行いだった。

だが泣き止んだ後も、プーディカやメデイアに母親の愛では無いが思い切り甘えていた所までは良かったのだが、その後、ギルガメッシュが小屋に入ってくるなり全てを台無しにしたことは言わずもかな。

こうして狂戦士バーサーカーを覗いた、この周辺で現界した全てのサーヴァントが揃った。そして現状を纏める為にジャンヌ・ダルクの前、情報交換が行われようとしていた。

「では皆さん、今このばでわかりきった情報を纏えましょう。現状、聖杯戦争で召還されたことが確認できるサーヴァントは全てマスターである・・・えつと」

「むっ・・・どうしたジャンヌ殿。何故そこで口を閉ざす？」

ジャンヌは重要なことに気がついた・・・そう、この場全てのサーヴァントはマスターの名前を知らないのだ。

昏睡していたマスターが目覚めたは良いが、その後、色々ごたごたが続いたため聞き出すのを忘れていたのだ。

と言うよりきちんとした自己紹介をしても居ないではないか

「ふむ．．．ならば主らと私、そして幼子の自己紹介という奴から始めようとするか」

ならば．．．と壁に寄せていた自身の身を自分達を背後からプーディカに抱きかかえられている、幼きマスターの元へと歩み寄る。

「始めまして．．．だな。影の国からまかり越した。スカサハだ。今宵はランサーのクラスで現界した。．．．と言っても、まだ良くわからんだろう。」

「私はプーディカ。目の前のお姐さんと一緒にライダーのクラスで君の元にやってきたよ。かわいいおちびさん」

「キャスターのクラスで現界しました。メディアです。よろしくね。マスター」

「サーヴァント、セイバー御身の元にはせ参じました。ガウエインと申します。どうかこの剣、貴方が通りし不浄を払わんことを願います。」

「アサシンのサーヴァント李書文。呵々！主のような童に呼び出されるとは思わなんだ。わしの拳は壊すことしか叶わんが……まあいづれ振るわれることがあると期待しよう」

「サーヴァント、ルーラー。ジャンヌダルク。貴方のようなかわいいマスターに会えて本当に良かった。」

又
スカサハ・プーディカ……メデア……ガウエイン……李……ジャン

聞いたことは無い……けど何故だろう……僕は……彼らを知っている？

「ほら……後は貴方だけですよ英雄王。まだ先程泣かれたことを気にしているのですか？」

「戯け!!雑種ゴときが!!我が子供オレに泣かれたぐらいで気にするか……」

ジャンヌの含み笑いを鼻で返す紅い目をした男。

そうだ……僕、この人が入って来た時びっくりしちやつて

「あつ!マスター……」

僕は小さな足で危なげなくガウエインの横に立っていたギルガメッシュの前に立つ

そして小さい顔を見上げるような形でギルガメツシュを見つめ、

「あの……さつきは驚ろかしてごめんなさい」

小さい頭をぺこりと下げた。

「……何故頭を下げる……」

「解らない……けど、小さい頃……お父さん……だった人に、悪いことをしたらキチンとごめんなさいと言いなさい……って言われていたからだ……思う」

「思う?……随分と曖昧な……っ!」

まさか……一瞬、英雄王ギルガメツシュの脳裏にある予測が生まれる。だがこの予想が正しければこの小僧は

「小僧……自分の名を今この場、この我の目の前で告げてみる。英雄王が許す。」

何を言っているんだ？この場に揃う英雄でもこの英雄王の問いかけには疑問しか浮かばなかった。

一体彼が何に思い当たり。何故このときマスターの名前を問いかけるのか。

「っ?!まさか……」

ただ唯一、スカサハだけは英雄王の問いかけの真の意味を察した。だがそれ故に、苦虫をつぶしたような表情を浮かべ目の前のマスターの答えを待った。

だが………答えは返ってこなかった。

マスターと称されたこの少年は地面の下を向き、自身の名を口にするには無かった。

そして何時までも自身の名を語ることの無いマスターを見て、他のサーヴァント達も気づき始める。

「そう……小僧、お前は覚ええていないのだろう。自身の親を家族を、そして……自身の名前すら」

「……（こくり）」

少年は黙って頷くしかなかった。頷くことしか……できなかった。

「小僧……もう一つ問いかける。我オレと其処の道化たちがお前を見つけたとき、貴様は瓦礫の下で蹲っていた。貴様に何があつた？何故この様な破壊尽くされた残骸の下敷きになっていた。」

何が……あつた。

僕は……僕は

「其処までだ英雄王。我が主にこれ以上の重責を」

背負わすつもりか！と主の余りの辛そうな姿勢に我慢できなくなったガウエインが少年とギルガメツシユの間に入りやめさせようとする……

だが英雄王ギルガメツシユはその程度では止まらない。

「黙っている雑種!! 貴様に問うてはいない!! 我はオレこの小僧に問うているのだ!!」

ギルガメツシユの怒号と共にガウエインの右横から剣が射出され、その剣を防ごうとするも勢いに耐え切れず吹き飛ばされる。

周囲ではジャンヌをスカサハが、プーレイカを李書文がそれぞれの得物でマスターへ駆け寄るのを遮られ、唯一動けるメディアもマスターである少年を自身の小さい体で支

えギルガメシユを恐れつつも睨みつけることしか出来ない。

「小僧……この我を……英雄王ギルガメツシユを従わせようものならば!! その身に抱えたものを己の口で発してみせろ!!」

「うっ……!」

思わず口を押さえてしまう。思い出すだけでも吐き気がする。考えるだけでも

膝が震える。もう一度倒れてしまいそうだ。

このまままた意識を手放せば確かに楽になれると思う。目の前の英雄王は認めてくれないけど……だけだ

「貴様の毒を！貴様の言葉で！貴様の口で！発して見せよ!!そのような覚悟も無い者がこの英雄王ギルガメッシュを従わせるもの・・・？思い上がるなよ・・・さあ!どうする」

僕は・・・僕は・・・

「やめてください英雄王!まだこんな小さい子供に「待つてください」マスター!」

胃から逆流してくる吐き気を我慢しつつ、僕を必死に庇ってくれるメディアさん押しわけ、自分の頭上、僕を見下ろすその紅眼の眼光を真正面から受け止め

「お話しします。・・・おぼろげで断片的ですが・・・皆には知っていて欲しいから」

僕は語りだす。名も知らぬ僕だった者の過去を

僕はごく普通の父、母、そして妹の4人家族で暮らしていたんだと思う。

その殆どの記憶は無いけれど、きっと幸せだったんだと思う。

だけどある日、家族団らん、何時もと同じ日常を送っていたある日それは起こった。

僕が住んでいた地域が黒い異色の兵隊の襲撃を受けたのは

大人たちは殺された。勿論僕の両親も例外なく殺された。

そして、幼かった僕と妹は兵隊に連れ去られ、そしてあの地獄に放り込まれた。

最初、其処には同じように連れて来られた子供たちで溢れ返っていた。

僕達はそこで白衣の服を着た大人たちにN0を付けられ数字で呼ばれていた。

N0. 999、それがあの場で僕に与えられた名前だった。

「っ！もう・・・耐えよ！」でも」

「お主もサーヴァントならば、聖女と呼ばれた英雄ならば黙ってマスターの話を受け。」

その目に涙を浮かべて、マスターの過去の語りを、辛い過去を語るのを止めようとするジャンヌをスカサハが嗜める。

僕はそんな彼女に今向けられる必死の笑みを向ける。

さあ続きを話そう

集められた子供は1000人、赤ん坊から小学校に通えるくらいの子供が集められ、日々研究と称された拷問が続いた。

食料や水は必要最低限の物を与えられ、催促すれば殴られ、蹴られ、終いは冷たい氷のような寒さの牢屋に押し込められる。

そして常に白衣を纏った大人の実験台にされた。

おかしな薬を投与され、徐々に体が腐っていく者、精神が狂い生きながらにも死んで

いる者、体が破裂する者。そんな者は日常茶飯事だった。

僕も自分の体が自分の者とは思えなくなっていた。

指先の感覚は無くなり、体は常に炎を当てられ手いるかのように熱い……だけどそれでも耐えた。

日に日に減っていく子供の数、それに伴って投与される薬の量も増えた。

寒いけど熱い、手足は歩けど感覚は無い……僕の体は終に1人では動けなくな
り

終に1000人いた子供の数も1/100にまで減ってしまった。

それでも僕は耐え続けた。きっと僕のようにこの施設の何処かで生きている妹と共に日常生活を送れる日々が来ると

何故ならこの白衣の男、その一番偉い人が言ったのだ。

『我々の実験に全て耐え切ったものにはここから出してあげよう……序に子供らしく何か叶えて欲しい事があれば叶えてあげよう』

僕はその言葉を信じて……必死に耐えた。体が自分の物で無くなろうとも

そして最後の実験、僕はあるものを体の中に入れられたんだと思う。

「ある物？主はそれが何かわかるか？」

僕は李書文の問いに首を振った。僕はその時、視界を機械で封じられていて何を入れられたのか解らなかつた。

ただ……もしかしたら僕の中に入れられたあれは

話を進めましょう。僕はその後自身の中に広がるように溶け込んできたその熱に焼かれそうになった。その熱は今まで味わったことも無い、まるで灼熱のマグマのような・・・全てを溶かそうとする熱が僕の意識をも溶かそうとしてきました。

でも僕は耐えた・・・この実験に耐えれば僕は妹と共にここから解放されると

そう信じていた。・・・そんな時だ、僕の耳に聞こえてきたある男の声で僕の意識は絶望に叩き込まれた。

『しっかし大丈夫かよ・・・No999で失敗したら、もうストックは無いんだろ。』

ストックは……無い

僕はその意味を知ったとき、全ての希望が失われた。妹は……自分が必死に救おうとしていた妹は……ツ既に

僕はこの時、生きる希望を全て失った。そして体を駆け巡る熱に身をゆだねた。

熱はこの身を焼くだけでは飽き足らず、僕の記憶を……殺された家族の記憶から施設の子供、そして……最後の希望であった妹の記憶、終には地震の記憶までを奪おうとした。

意思が熱に持つていかれる。深き闇の暗き海の底に意識が沈んでいこうとする……その時だった。

目の魔に光り輝く黄金の杯が現れ僕に語りかけ知識を与えた。

そして最後に問いかけたのだ。

“お前の願いは何だ”と

僕は消え行く意識の中、こう答えました。

「家族を……平和な日常をください。そしてこの様な、僕の様な不幸な子供を生まない。助けられる力をください」

「これが・・・僕の・・・全て・・・です。」

「マスター!!」

途端に倒れこむ少年。自身の身に起きた吐き気もするような経験を、思い出したくも無い経験を自らの口で語ることが最後までやり遂げた少年は……ぷつりと糸が切れた人形のように倒れ崩れ落ちた。

ジャンヌやプーディカ、ガウエインなどがその身を地面に叩き付けまいと駆け寄るが、その前に、少年の体は何時の間にか現れた漆黒の騎士に地面に落ちる前に抱えられていた。

「……バーサーカー狂戦士!?!」

ジャンヌが驚くのも無理が無い。目の前の漆黒の騎士は先程まで大規模な召還の余波で現れたモンスターの対処をしていたのだ。

かの騎士がこの場にいると言うことは外の敵は全て、粗方片付いたのだろう……だがジャンヌが驚いたのは其処ではない。

狂戦士……それは7騎のサーヴァントの内、理性と引き換えに基本能力を大幅に強化するクラスのはず

先程までの漆黒の騎士は確かに狂戦士のクラスに相応しき暴虐の限りを尽くしていた。

だが今日の前でマスターを優しく抱える黒騎士は本当に先程までの狂戦士なのか？

そう思いたくもなるほどに、洗練された気、そして狂戦士の代名詞でもある狂気が、殺意を感じられない。

「貴方は……一体？」

黒騎士はジャンヌの問いに答えず、その手に抱えた幼きマスターを黙ってベッドに寝かせ。

「古代ウルクの王にしてバビロニアの王よ。1つ……私の問いを許して欲しい」

その頬を無骨な鎧を纏ったまま触り、後ろの英雄王へと問いかける。

だがそれ以上にこの場にいるサーヴァントの何人かは驚きの余り声を失う。

「バーサーカー狂戦士であるはずの黒騎士が声を発している。理性を犠牲に力を求めたはずのバーサーカー狂戦士が理性を取り戻すなど聞いた事が無い。

「ジャンヌよ．．．主ならばそのサーヴァントの真名や現在のクラスがわかるはずだろう．．．」

「あつ．．．そうか。」

スカサハに悟られるまで自身のクラスとしての能力を忘れていたジャンヌは自身の力に意識を向け、今現在の黒騎士のクラス、そして真名を看破する。

「っ!? そんな馬鹿な・・・クラスが・・・狂戦士から騎士セイバーに変わっている・・・それに、貴方は・・・」

黒騎士の手が自身の兜ヘルムに触れ同時に黒騎士の周りを覆っていた黒い煙が霧散する。そしてその全身が露になると同時に、白銀の騎士の表情に憎悪と怒りが浮かび上がる。

「貴様ツ！ 誇り高き騎士と王より認められた貴方が!! よもや狂戦士バーサーカーにまで身を落とすと
は!!」

「そうだガウエイン卿・・・一度は愚かにも狂戦士バーサーカーに身を落とし、本能のままに暴虐の限りを尽くした愚かな騎士だ」

ガウエイン程の冷静な男がこれほどまで憎悪を向ける相手・・・そんなものは歴史を紐解いてもこの世に2人もいない

「ランスロット卿……まさかこの様な場所で貴殿にお会いするとは」

ガウエインはその腰に携えた聖剣を引き抜き、彼にとつての裏切りの騎士。ランスロットへとその切っ先を向ける。

「どうした……貴殿も早く剣を抜け」

「……抜きませぬ、ガウエイン卿。貴方は今この場でなさることは、私に剣を向けることですか？」

「何を世迷言を……貴殿は王を、我が弟をその血塗られた手で殺した。そんな貴殿に剣を向けるは道理で」

「道理……世迷言を言っているのは貴殿であろう。怒りに任せ剣を抜き放ち。そのよ

うな大声を上げて・・・貴殿はこの幼きマスターのことを気遣っていない・・・」

「全く持つてその通りだ。ガウエイン殿・・・主が今忠誠を誓うは過去の騎士王か・・・それとも幼くも勇気を持つてその過去を明かしたマスターか？・・・」

「グッ・・・私は」

ガウエインも解っていた。ランスロットだけでなくスカサハに言われるまでも無く。それも考えるまでも無い。

再び抜き放った聖剣を自身の鞘に戻す。

「失礼したスカサハどの・・・確かに考えるまでも無い。私念にとらわれ愚かな過ちを繰り返すところだった。貴方にも、先ほどの非礼をお詫びします。ランスロット卿」

「気にしないで欲しい。そして私に対する謝罪は受け取れん。私が嘗て愚考を行い王を

苦しめたのは事実。許してッ!？」

許して欲しい・・・そう口にする前にランスロットの目の前に向かって飛来する槍を眉間ぎりぎりですり受けて止める。

その槍が飛来してきた方向には苛々を表に出した英雄王が

「これはとんだ失礼をした。では不遜な私から問いをおかけすることをお許しく下さい」

「・・・我^{オレ}を無視した愚公は・・・まあこの際良いだろう。それに貴様の外での害虫掃除の褒美もある・・・問いを許す。申せ」

「ありがとうございます。では一つ・・・英雄王ギルガメッシュ・・・貴殿は先のマ

「そのお言葉、このランスロットが確かにお聞きいたしました。その誓いを違えぬ事が無いことを願います」

「戯け・英雄の中の英雄であるこのギルガメッシュが一度口にした約束を違えるか」

・・・こうしてこの場に今、全てのサーヴァントがこの幼きマスターに誓いを立て

た。

この名も無き少年は一体この世界で何をなすのか

そしてこの世界では聖杯戦争は行われるのか

この世界では何が起こっているのか

全ては謎のまま、誰にも道はわからない。

願わくば・・・この名も無き少年に・・・明るい未来が訪れることを・・・私は願おう。

第1話. ヴォルフ

お前の存在は・・・その根底から狂っている。

目の前に無残にも地べたに這い蹲り、こちらをその憎しみの籠った瞳で睨み付けてくる男は呪詛めいた言葉をはき捨てる。

手足は潰れ、主因の瓦礫からは男の血がにじみ出てくる・・・見るも無残

このまま行けばこいつは後数分もすれば出血多量で死んでしまうだろう。

それもいい・・・痛みにのた打ち回り、自身の行いを悔やみながら死んでいくと言うのも、こいつらにとっては罰だろう。

自らが私欲を尽くし・・・大勢の人の命をごみのように扱い、利用価値が無ければ捨てる。

例えそれが・・・年端もいかぬ子供だったとしても

そして自分の命が奪われようとなっているこの時、こいつらは最初になんて呟いたと思う？

「あつ・・・！たす・・・けてくれっ！・・・手足が潰れて痛みで死にそうだ!!」

まだ子供の僕に男達は藁にもすがる様に助けを求めてくる。自分達が他の命に対してどのような行いをしたか・・・その全てを脳裏から消し去ったように。

こいつらは……

』

漆黒の外装に身を包んだ少年の右腕に紅の槍が顕現する。

何も無い空間から一瞬にして現れたそ朱槍を目にした研究者はうろたえるしかなかった。

「おっお前……伐^{ブレイザー}刀者だったのか!!」

伐^{ブレイザー}刀者……己の魂を固^デ有^{バイ}霊^ス装と呼ばれる武器に変換、顕現させ、その身に宿りし魔力を用いて異能の力を操る特異存在

1000人に1人の確率で生まれてくる伐刀者ブレイザーは能力しだいではこの世界の運命すら変えられるほどの強大な力を持っている。

炎や水、雷などの自然を操る力から、姿を消す、音速で加速する、力を増大させるなどのテレビのヒーローまがいの能力まで幅広く、能力の用途は存在する。

そして、その力はたった一人の伐刀者ブレイザーが誕生しただけで戦争に勝利してしまうほど強大である。

だが、伐刀者ブレイザーが誕生する確率は1000人に1人ととても低い。

故に様々な国は考えた……人の手で、人工的に伐刀者ブレイザーを生み出すことを

自らの手で超人を作り出そうとした。

「その結果……その結果あなた方は……多くの命を殺した。見殺したんだ……」
「ひいつ!?ちつ違う!……我々は決して自分の意思ではなく……上から……」

ザシユツ!

上から言われて仕方なくやった。……そう男は言い訳を口にする前に僕は自らが手にする呪いの朱槍が男の首を、その命を刈り取る。

鮮血が迸り、しばらくして男の肉隗から血溜りが広がる。

だが僕は自ら刎ねた愚かな男の成れの果てを見ても、その血なまぐさい腐臭が鼻に入ってきてても動揺はしなかった。

ただ僕は……

僕は幼少の頃、とある研究機関に実験動物として扱われていた。

当時僕と同様の扱いをされていた子供が1000人近くいたが、実験の最終段階の時点では僕以外の子供は実験の犠牲となってしまう、僕もその命の灯火を消されかけた。

だが実験の最終段階に僕に入れられたそれのおかげで僕はその命を散らさずにすんだ。

聖杯……人の望みを、人の欲望を取り込み叶える万能の願望器

聖杯から流れ出る魔力に施設は飲み込まれ崩壊、働いていた研究者も全てが死亡

僕は瓦礫の中でその魔力に飲まれていたところを今の家族に救われた。

いや……家族……というのは正しい認識ではない。

正しく言い換えれば彼らはサーヴァントと呼ばれる者たち

過去・現在・未来において英霊、反英霊として祭られ昇華した彼らはその存在と引き換えに聖杯を求め戦うことを強いられる。

自らが望みを叶える為に、マスターと呼ばれる召喚主と共に聖杯を求める。

本来1人のマスターに召還されるサーヴァント

だが僕は本来呼び出されるであろう7騎のサーヴァントのほかに、1体の番外サーヴァントを含めた8騎のサーヴァントを呼び出し、その全てと契約を結んだ。

彼らは僕の中にあるであろう聖杯から直接魔力を受けて現界しており、彼ら自身も本当の意味では何故こんな事が起こったのか理解はしていない

だがあの時……僕の意識が消えようとする中、聖杯に願った願い

家族が欲しい……そして、僕のような者を救う力が欲しい

聖杯は僕の願いに応えてくれたが故に彼らを僕の元に送ってくれたのかもしれない。

僕は彼らのことを家族と呼び、彼らも僕のことを実の息子のようにつけて接してくれている

(一部の例外はいるが・・・)

こうして僕は彼らと彼らが名付けてくれたヴァルフと言う名前と共に新たな人生を踏み出した。

だけど・・・その人生がこんなに辛いものとは思わなかったわけで

——とある空間

広々とした砂浜に澄んだ海

そんなリゾート空間において僕、ヴァルフ・D・ゴールドは目の前の存在に自分が持

てる全力で槍を放っていた。

灼熱の太陽と沈み込む砂に体力が持っていられる悪条件の中、僕は目の前の女性に穂を突きたて、時には刺突と見せ掛け槍を回し石突を上からたたきつけ、時には向かつてくる女の槍の穂先を腹で受け流しつつ、懐から穿つ。

それを1時間、一瞬のすき無く攻め続けるが目の前の女性は涼しい顔でその全てを捌ききる。

「どうしたっ！ 疲れが出てきたか槍捌きに乱れが出てきているぞ！」

腰に手を当てやれやれと言葉を吐き捨てるその姿に僕は一旦距離を取る。

このままただ小まめに攻め立てるだけでは目の前の女性には届かない。

(ならば……全ての一撃をこの一手に込める！)

出来るだけ低く姿勢を取ると同時に口ずさむ。

「加速、加速、加速。強化、強化、強化」

ケルト神話におけるルーン魔術、しかも失われたと言われる神代の時代の古代のルーン魔術において自らの脚力と筋力、そして一撃における威力を強化する。

「ほう・・・ルーン魔術を用いた。遠距離からの一撃に全てをかけるか・・・面白い。」

全てがわかった上で目の前の女性は仕掛けもせずに出て来て全てを受け止める形でこちらを迎え打つ方を取る。

圧倒的な実力と余裕が無いと出来ない動きだ。その余裕がうらやましく思うが

「今日こそこの一撃……届かせて戴きます!!」

その時、地面に穿たれた強化された踏み込みの跡をと巻き上げられたビーチの砂を残して、ヴォルフの姿が掻き消え

ドゴオオオン!!

大きな爆音と共に一直線に穿たれた一撃。その速さたるや巻き上がる砂がその後を追うkのように巻き上げられる。

大抵の人間ながら肉塊も残らない遠距離から勢いを加えた一撃

だが

「いっこの一撃を受け流しますか」

「良い一撃だった。私で無ければ恐らく先の一撃で相手は死んでいるだろう……だが、先がわかる一撃なれば、避ける事など造作も無い」

僕の額から流れ落ちる汗

完敗だ。音速に近い一撃をこの人は避けた。正真正銘の化け物だ。

「では……今度は私の番だな」

にこりと笑いかける妖艶な笑みを最後に目の前を過ぎ去った紅の閃光と全身を襲った痛みに、僕は意識を失った。

次に意識を戻したのはあれから3時間ほど経過した後だった。

「ほれっ！起きんか・・・全く。あれしきの打撃で情けない」

（いや・・・あれしきって、数秒間に数1000回も穿たれたんですけど）

まるで生き物のように曲がったりなんてする変幻自在の槍捌きをどうしろというので？

しかも念のため強化していたのにも拘らずに意識を失うほどの痛み。普通に受けて

いたら死んでるところだ

と・・・色々文句を言いたいのだが言ったところで

『それはお主が弱いからだ・・・そんな小言を言う元氣があるのならばまだまだまだ行けそうだな』

・・・結局、前はそれで体がボロボロになるまで鍛えられ、あとでメディア姉さんに魔術で直してもらうまで一步も動けなかったな・・・

「ん？何だその目は・・・何か言いたい事があるのか？ヴォルフ」

「いえいえ・・・何でもございませんですよ。スカサハお母様」

そう……この人はスカサハ。アイルランド、アルスター神話における影の国の女王と呼ばれていた槍の達人にして大魔術師。

幾人の弟子を輩出し、その何人かは有名な英雄とまで上り詰めている。

何でも長き月日の果てに半ば神霊と化しており、人として死ぬことは出来ない存在。本来ならばサーヴァントとして呼ばれることは無いはずなのだが何故呼ばれたかは本人曰く不明

そして

「お母様ではない。ママと呼べと言っているだろう……全く、小さい頃はあんなにママ、ママと甘えてきたのに」

悲しいわくとうそ臭い泣きまねはやめてください。今だって膝枕しているんだから十分に甘えているでしょう

「違うぞ。私は膝枕などではなくて、もっとうとう……私の胸で抱きしめ頭を撫でるようになしてだな」

はあ……解っていたただいであるうか。スカサハお母様……本人曰くママと呼んで欲しいらしいが……はこの通り極端なのである。

小さい頃は自ら生んだわけではないのにこんなにもいえるほどの愛情を今に到るまで与えててくれるのだけど如何せん極端

恐らくずっと一人でいた為であろうが、僕としてはそろそろ恥ずかしい。

そして修行となればそれはもう……容赦は無い。

小さい頃から教わってきたルーン魔術と槍に関しては僕はお母様に教わったのだ。

ルーン魔術に関してはまだマシ。問題は槍のほうである。

一通りの基礎を毎日叩き込まれ、模擬戦と称した修行ではボロボロになるまで叩き潰され、時には

「さあつ！今日はより実践に近づけての修行だ!!」

と言われて見れば目の前に数十対ものゴーレム

正直数対倒した後には兄さんが助けられなかったら本当に死んでいたんじゃないかって

本人曰く

「実践の中でのみ技術は磨かれる。お前の中に確かな勇気があると言うのならば自ら戦火に飛び込むくらいに余裕が無くてはいけないだろう」

と普通小学生の息子にモンスター当てるでしようか？

まあ・・・おかげで大抵の物事には動じなくなってきた。

それに・・・お母様たちがこうして自ら僕を鍛えるのには理由があった。

僕の肉体、俺の心臓とほぼ同化している存在・・・聖杯

聖杯は僕を通じてお母様たちサーヴァントを現界させるだけの魔力を常に流しているだけで無く、僕にも常人では測りきれないほどの魔力を与えてくれる。

だが反面、僕の幼い肉体に聖杯の過剰な魔力は耐えられず、何もしなければ直ぐに僕という器を破壊してしまう。

現在はギルお父様の薬……そして、姉さんの作成した魔力を抑える封印を用いることで何とかとどめている。

しかしそれではいつか限界が来てしまう……そう危惧した僕の家族は多少の無茶を押し通すことにした。

常に一定量の魔力を放出させ、同時に肉体を聖杯の魔力に耐えられるように改造していく。

つまりは僕の肉体という器をを聖杯が耐えうるものに作り変えると言うことである。

更には最悪の事態……サーヴァント達が離れているときにその身を守るように彼らは各々の武術、魔術を僕に教え込んでいる。

スカサハお母様は、ルーンの魔術、そして槍術と言ったように

「……しかし流石は古代ウルクの王にして最古の王と言うべきか」

周囲の光景を見渡しながら思わず感嘆の言葉を呟くスカサハ。僕にはお母様の言葉が何を示しているのか直ぐにわかった……故に同意する。

この見渡す限りのリゾート空間

人工物などは殆ど存在せず、右には地平線まで続く青々とした海。そして左には緑が生い茂る植林。

まるで無人島のような場所。実は全てが魔術で作りに出されたものであり、ここは地球上の地図には載ってはいないのである。

ことは数年前

「しかし、スカサハ殿、幾ら我らが死力を尽くし、主を鍛えたとしても、耐えうる肉体になるには何年かかるか……」

「それに業を教える場所は如何する。主も今の時代で言うところの学校……に通う年頃であろう。長きに渡って遠方に足を運べぬが道理」

「ランスロットと李書文の言うとおりだった。鍛えるにしても散発的な鍛え方では意味が無い上に、修行する時間や場所も無い」

連戦練磨の英雄が思考を張り巡らせる中、ただ1人だけそんな彼らを見物するかのよう
うに笑っている者がいた。

「クククツ・・・流石に財を持たぬ雑種どもよ。この程度の障害で行き詰まるとは滑稽よ
！フハハハハハ!!」

「では英雄王。そのように笑うには貴方にはこの問題を解決できる方法があるのです
ね・・・」

「当たり前だ道化！我が宝物に不可能の文字は存在せん！見るが良い!!」

そう言ってギルガメッシュが何も無い空間から取り出したのは半径50cmほどの
球体だった。中に南国のリゾートを再現したようなジオラマが再現している。

「きれい!!」

ヴォルフは余りの景色の綺麗さに興味本心で思わず飛びついてしまったのが運の尽きだった。

“バシユツ”

その球体に触れた瞬間、ヴォルフの足元に魔方陣が現れたと思いきや、次の瞬間にはヴォルフの姿が瞬間移動したみたいにぶれて消えてしまったのだ。

「マスター!!?アーチャー!マスターは何処へ行ったのです!!」

「グウオ!お・・・落ち着け・・・首をしめ・・・」

「良いから早く!!私のマスターは!私のヴォルフを何処へやったのですか!!!!」

「おっ落ち着きなつてジャンヌ」

普段は見せないような鬼の形相でギルガメッシュを締め上げるジャンヌを慌ててブーディカが羽交い絞めにして何とか止める。咳き込むギルガメッシュがジャンヌに文句を言おうとするが、その形相に若表情をゆがめるだけに収める。

「全く・・・安心しろ我のヴォルフはこの中だ。詳しく知りたければヴォルフのように触れてみるが良い。こんなふうにな」

ギルガメッシュが先程のヴォルフのように球体に右手を添えた。その瞬間、ギルガメッシュの足元にヴォルフが消えたときと同様に魔方陣が展開され、そのままその姿が消える。

「なるほど・・・この球体に触れることで何処か別の血に転送されると言うことか・・・
どれ」

「あつ！待ってくださいいランサー！」

アーチャーの後を追うようにして球体に触れるサーヴァント達、一瞬、球体からの魔力に筒またと思いきや、一瞬で周囲の景色が変化する。

青い海と緑溢れる植林はまさに、今先程まで自分達の目の前にあった球体内のジオラマそのもの

「ようやく来たか・・・この我を待たせるなど今すぐこの場で首を刎ねてやりたいところだだが、その無様な驚き様に免じて笑って許してやろうフハハハハハハ!!」

「フハハハハハ!!」

目の前の棧橋の向こう、自分達さきに消えてしまったギルガメツシュがヴォルフを肩車している。

「……アーチャー……とにかく説明して下さい。ここは何処なのですか？」

「解らんか魔女。ここはお前達が先程まで目にしていた球体の中にお前達が転移したと言っただけだ。……つまり」

尾言うどギルガメツシュはこの場所について語りだした。

つまりここは魔術で構成された空間であり触れたものを自動的に球体内の空間、つまりこの南国リゾートのジオラマに転移させると言ったもの

ここならば誰の迷惑にもならない上に、幾ら魔力を放出しても特殊な結界で魔力が漏

れる事もない。

「しかもこの空間での時間の流れが違う。この空間内の時間で言うところの30日は外で言うところの1時間にもみたくない」

「なるほど・・・この空間全体に継続的な時間制御魔術を発動させることで内部の時間と外部の時間を変異させていると言うことなのでしょうね」

確かにこれならば年月の問題も解決され、数年続けていればある手度、無理をしなれば聖杯の魔力に肉体が負けることは無くなる。

こうして僕の一日は24時間である。という概念は崩壊した。

子供らしく、学校に行き、学び、友達と遊び、家族と仲睦まじい時間を過ごした後、無茶とも言える修行に虐められる日常を送っているのである。

「そろそろ休息は良いだろう。本日も本格的な修行に入るぞ・・・なんだ？その顔は」

「別に・・・なんでもない」

その後、ヴォルフは8時間にも渡り、聖杯の魔力を利用して生み出したゴーレム数十体を相手に死闘を繰り広げた。

と言うのも時間の感覚がずれてしまう空間が故に、様子を見に来たメディア姉さんとお母様と、プーディカお母様がスカサハお母様を説得することで何とか8時間で終わっただけであり、プーディカお母様やメディア姉さんが来なければ一生終わらなかったのでは

「キヤー!? マスター!!!」

既にか荒田ボロボロの慢心相違の状態で砂浜に倒れ、耳に聞こえたメディア姉さんの姿相応の叫び声を最後に僕の意識はまた深い闇に落ちていくのであった。